

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp

獣

医

の

カ

ル

テ



⑦



たかはし動物病院長

(富山市)

高橋 明寿

犬猫の目のトラブルと言えば、充血、目やに、涙目、目が開けづらいといったものがぱっと浮かぶでしょう。それらの次に多いのが、左右の瞳孔の大きさが違っていると訴え来院されるケースになります。顔の印象が変わるので飼い主さんが気づきやすく、症状が出てから来院までの期間が短いことが多いです。今回は、この瞳孔不同についてお話ししたいと思います。

瞳孔不同



虹彩萎縮によって大きくなった瞳孔

量を調節することです。自律神経支配の瞳孔筋の運動により、虹彩を使って瞳孔の大きさを変え、調節しています。

神経病変疑う場合も

瞳孔不同は目の病気と思われるでしょうが、神経病変が原因のこともあります。一般的な眼科検査で原因が分かる場合が多いです

が、神経病変を疑う場合などは、CTやMRI、脊髄液検査などの特殊な検査が必要になってきます。

瞳孔不同の診察・治療で最も重要なのは、どちらの瞳孔が異常かを把握することです。両目とも異常という場合もあり、注意して診察します。初めの時点で取り違えてしまうと治療効果が出ないばかりか、症状を悪化させることにもなりかねないので、しっかりと調べる必要があります。

ここで瞳孔不同を起す代表的な病気を紹介します。目の疾患で

は、緑内障やぶどう膜炎があります。緑内障では散瞳（瞳孔が大きくなる）、ぶどう膜炎では縮瞳（小さくなる、細くなる）することが多いです。また腫瘍や虹彩萎縮では瞳孔の大きさはさまざまに変化します。

神経の疾患では、視神経炎や腫瘍、感染性疾患、外傷などがあります。視神経炎では散瞳、腫瘍ではさまざまに大きさに変化します。ホルネル症候群と呼ばれる疾患では縮瞳します。

紹介した中には治療の必要がないものもありますが、ほとんどの場合は治療が必要です。点眼治療や内科治療の他、外科治療が必要になることもあります。

現在瞳孔不同があるようなら早めにかかりつけの先生にご相談ください。瞳孔不同は急に現れます。もし異常を感じたら様子を見ず、動物病院を受診してください。